

第二言語習得研究における 意味交渉の課題

宮崎 里司

キーワード

意味交渉・インターアクション問題・談話調整行動・調整ストラテジー
・バリエーション

1. はじめに

1980年代以降、KrashenやLongに代表される第二言語習得研究は、「理解可能なインプット」(comprehensible input)をキーワードとして発展してきた(Krashen 1982; Long 1983)。さらに、彼らの理論を応用した意味交渉研究(negotiation of meaning)(Gass and Varonis 1985, 1994; Swain 1985; Pica 1991)では、インプットならびにアウトプットに関する実証研究が展開された。意味交渉研究は、接触場面での母語話者側の特徴的な調整行動である、フォリナートークやティーチャートーク、非母語話者の特徴としての中間言語といった、一部の参加者のインターアクション行動だけに注目せず、参加者間で問題を解決しあう過程でどのような調整行動にもとづく発話交換が行われるかに注目した点で評価できる。しかしながら、これまでの意味交渉研究では、調整行動の全容を解明する上で、依然としていくつかの検討課題が残されている。本稿では、先行研究が、どのような対策を講じてきたのかについて概観し、今後の意味交渉研究の発展のために具体的な提案をしていきたい。

2. これまでの意味交渉研究の態度

これまでの意味交渉研究は、どのように進められてきたのであろうか。今後研究を改良していくために、ここでは、まず先行研究でフォーカスが当てられていた項目について問題点を列挙しながら検証することにする。こうした項目は、必ずしもすべての研究で対象になっているわけではない。しかし、多くの意味交渉の研究者に共通した態度として認識されている項目であり、また、ほとんどの意味交渉研究は、このフレームの枠内でデザインされているといつてよい。

問題点1 意味交渉研究の中心作業は、調整ストラテジーの類型化にあるのか

問題点2 意味交渉の分析対象は「意味」だけで十分か

- 問題点 3 意味交渉の過程で現れる調整行動は、聞き返しのストラテジーの検証だけで明らかにできるか
- 問題点 4 接触場面でのインターアクション問題は、一回だけの調整交渉で取り除かれるものか
- 問題点 5 現在の交渉研究は、接触場面での参加者のバリエーションを十分考慮しているといえるか
- 問題点 6 意味交渉は、接触場面で実際に対面する参加者間でのみ行われるのか
- 問題点 7 これまでの意味交渉研究でデザインされたタスクは、自然なインターアクション場面で起きる問題の解決に貢献したか
- 問題点 8 意味交渉の研究成果は日本語教育に十分生かされてきたといえるか

3. 問題点への再考

ここでは、意味交渉研究に関する以上の8つの問題点に対し、今後の発展ならびに展開のために、ドラスティックな再考を促すべきだという観点から論じてみたい。

問題点 1 への再考 意味交渉研究の主目的は、調整能力をどのように習得させるかにある意味交渉研究の中心作業は、調整ストラテジーの類型化ではなく、接触場面の談話の中で起きる問題を調整する談話習得と密接に関連していることを強く認識する必要がある。これからの意味交渉研究では、単にストラテジーをタイポロジー的な興味としてではなく、習得過程の問題分析を行う対象として捉える態度を示さなければならない。コミュニケーション・ストラテジーの中には、コミュニケーション問題が起きる場合に、トピック自体を換えて、問題を回避してしまうといった緊急避難的な機能しか果たさない調整行動もあるが、どのストラテジーが直接、習得に結びつくのかを見極めることが肝心ではないだろうか。

問題点 2 への再考 研究対象をインターアクション問題全般に広げるべきである意味交渉の研究対象は「意味」の交渉だけでなく、対象をインターアクション全般の交渉という観点から考察しなければならない。次の日本語非母語話者のディスコースを見ていただきたい。

例 1

FS: の、中には..閉め、閉める.閉め.閉ま 閉めます (笑い) 閉めます あ、だから、Um、水曜日と月曜日の外は、あの行ってほうがいいと思います。

(Miyazaki 1998 149頁 例10)

この例は、発話者 (F S) 自身、自・他動詞の選択過程で問題があるとマークし、自己調整行動を行ったものである。フォローアップ・インタビューの結果、F Sは、どちらを使うべきか迷った結果、連続的な6回の自己調整 (閉め、閉める、閉め、閉ま、閉めます、閉めます) を行っていたことが判明した。ここでは、「(市場は、月曜日と水曜日には) 閉まります」、または、「閉まっています」といったような表現が適切であると思われる。この場合、発話者が留意したのは、意味ではなく、動詞の弁別というきわめて文法的な問題であった。このほかにも、アクセントやモーラ (拍) といった音声、音韻に起因する問題も考えられ、それらは、「意味」という分野ではカテゴリー化できないものである。また、社会言語や社会文化といった項目での不適切さの交渉にいたっては、これまでの意味交渉研究ではほとんど明らかにされていない。意味交渉の研究を前進させるためには、「意味」だけに注目した、また、「意味」を問題の中心に置こうとする研究態度では、接触場面での調整行動の全容を明らかにすることはできないことを強く意識する必要がある。

問題点への3 問題を取り除く調整パターンには、さまざまなバリエーションがある

意味交渉で現れる調整パターンには、いくつかのバリエーションがあり、聞き返しのストラテジーの研究だけでは、すべての調整行動は検証できない。調整パターンは、参加者が、調整過程でどのような役割分担をするかによって決まる。言い換えれば、誰がその問題をマークし、調整行動をとるかということである。こうした問題を考える場合、エスノメソドロジーの会話分析派が提唱する「調整軌道」というメカニズムが示唆的である (Schegloff et al. 1977)。これを、調整行動を行う参加者のタイプから分類した場合、自己調整タイプと他者調整タイプという2つの談話調整行動に分けられる。自己調整タイプは、聞き手 (他者) が不適切さをマークし、話し手自身 (自己) が調整をデザインするもので、相手の発話を理解するための他者マーク自己調整と、話し手自身が不適切さをマークし、調整のデザインを行う発話の過程で現れる、自己マーク自己調整がある。一方、他者調整タイプ (宮崎 1995c) には、話し手が不適切さをマークし、聞き手に調整を要求する、自己マーク他者調整と、話し手が調整行動に全く参加しない他者マーク他者調整がある (Miyazaki 1998, 2000, 2001)。たとえば、理解のための調整行動は、聞き手による、聞き返しと呼ばれる調整リクエストマーカが引き金になって起こるものであり、他者マーク自己調整という調整パターンに分類できる。以下にその例を示したい。

例2

- 1 NS: (中略) 日本は、もう、ほら、儲け主義に走ってるから。
- 2 FS: えもう? (他者マーク)
- 3 NS: 儲け、要するに、お金を稼ぐ。(自己調整)
- 4 FS: ああ、そうですね。

(Miyazaki 1998 56頁 例1)

FSは、2で、反復・説明要求 (尾崎 1993) という聞き返しのストラテジーを使った

めに、それが調整リクエストとして機能し、3で、NS（日本語母語話者）が「お金を儲ぐ」ということばを言い換え、自己調整を行ったと分析できる。

これまでは、この聞き返しの調整行動を対象とした研究が主流であり、その他のパターンへの関心は、他者マーク自己調整に比べると乏しかった。しかしながら、発話者自身が調整リクエストマーカを応用し、聞き手（他者）から調整を引き出す機能をもつディスコースもある。これが自己マーク他者調整型調整ディスコースである。以下のディスコースで考えてみよう。

例 3

- 1 FS: ええっと、牧場でキャンプと、じょうぶ?、じょうぶ? (自己マーク)
- 2 NS: 乗馬。(他者調整)
- 3 FS: 乗馬、乗馬。

(Miyazaki 1998 97頁 例 3)

FSは、horse riding (乗馬) に対応する日本語を、「じょうば」にすべきか、「じょうぶ」にすべきかで迷っていたため、正確な発話のために、上昇イントネーションで、NSにチェックを求めたことがフォローアップ・インタビューによって明らかになった。この場合、この上昇イントネーションが、調整リクエストマーカとしての役割を果たしたと分析できる。ところが発話のための調整マーカは、調整行動を引き出す機能を果たすが、要求行動はいつも明示的であるとは限らない。他の参加者に対してははっきりとした発話意図（調整要求）を伝達できず、問題の発生を知らせるにとどまるといった一時的なポーズや繰り返しが現れる場合もある。こうした現象は、問題が発生したというシグナルを出す旗のような役割を果たすので、フラッグ(Flag)としてラベル化されることがある (Miyazaki 1999a)。このフラッグ型調整ディスコースを以下に提示してみたい。

例 4

- 1 FS: お子さんはいらっしゃいますか。
- 2 NS: はい。
- 3 FS: 何人?
- 4 FS: うん、あの、ああ、いち、いちい。(フラッグ型自己マーク)
- 5 NS: 一人。(他者調整)
- 6 FS: 一人です。

(Miyazaki 1998 121頁 例15)

4.でのFSによる不適切な部分の繰り返し（「いち、いちい」）を、不適切マーカとして捉えたNSが調整を行った例である。この例は、例3の1.で示した、「じょうぶ?、じょうぶ?」と類似しているが、例3には、調整を求める発話行為とみられる疑問形が確認されるのに対し、「いち、いちい」の部分には、明確な調整要求がないと判断できる。一方例4.で、NSは、FSから直接的な調整要求を受けていないが、FSのフラッグを、間接的な調整要求と判断したと考えられる。このように、不適切マーカによる調整を求める

発話行為が成功するかどうかは、次の発話者がそうした発話意図をどの程度理解できるかによる。発話行為の意図が十分に汲み取られない場合、調整行動は失敗に終わるので、こうした調整行動はあまり効果的ではない。

また、発話者が調整行動に参加しない、「他者マーク他者調整」というパターンも存在する。このタイプは、不適切な発話を行った発話者自身は、問題があったことに気づかず、調整が行われて初めて、自らの問題に気づく場合であるが、結果的に、会話の流れを維持する役割を兼ね備えているため、サポートマーカーと名づけてもよい。このサポートマーカーの基本型は、次のように構成される。

例 5

- 1 FS: い、いちが、一月にメルボルンに行きました
- 2 NS: 来ました

(Miyazaki 1998 199頁 例 3)

NSは、FSの発話「行きました」に対し、明らかに不適切な発話というラベルを貼り、しかも相手に確認せずに調整できると判断したため、「来ました」と直接調整したと述べたことが、フォローアップ・インタビューによって明らかになった。なお、こうしたサポートマーカーは、教室場面で不適切さをよりの確に類推できる日本語教師によって採用されるケースが多いのではないだろうか。なお、この調整軌道の下位分類として、「他者マーク無調整」が考えられる。これは、不適切な問題が発生した場合でも、発話者自身も、聞き手である他者も、調整のための発話行為を全く採用しない場合である。聞き手によって、調整の有無が、全体のディスコースの流れにあまり左右されないと判断された場合に起こるディスコース・パターンである。

問題点 4 への再考 意味交渉過程では、連続した調整行動が起きる場合がある

接触場面でのインターアクション問題は、一回だけの調整交渉で取り除かれない場合もある。こうした問題では、ネウストプニーのコミュニケーションルール (Neustupny 1987) のうち、メッセージをどのようにアレンジするのかに関するメッセージルールと、誰とコミュニケーションするのかという参加者ルールが示唆的である。今までの第二言語習得における意味交渉の研究では、主に 2 人の参加者による一回だけの単純調整を研究対象にしてきた。しかしながら、接触場面での調整のディスコースは、調整の回数 (調整フレーム) と参加人数 (参加者ネットワーク) において、さまざまなバリエーションが現れる可能性が高い。ここでは、まず、調整フレームについて触れ、問題点の 5 で参加者ネットワークを扱うことにする。

これまでの意味交渉の研究では、連続性のある調整行動への関心が乏しかった。Jefferson and Schenkein (1977) は、調整が連続的に行われながら発展している調整行動とそうでない調整を区別している。ここでは、一回だけの調整に基づく発話交換を「単純調整」、連続した調整行動の連鎖を「複合調整」と呼ぶことにする。複合調整のディスコ

ースの構造は、たとえば以下のような連鎖で現れる。

例 6

- 1 Speaker X: 問題が内在している発話
- 2 Speaker Y: 聞き返し 1 (他者マーク 1)
- 3 Speaker X: 調整 1 (自己調整 1)
- 4 Speaker Y: 聞き返し 2 (他者マーク 2)
- 5 Speaker Y: 調整 2 (自己調整 2)

ここで、理解のための複合調整を、実際の発話交換で確認してみる。

- 1 NS: あるいは、好奇心が強い言い方しますよ。
- 2 FS: 好奇心? (他者マーク)
- 3 NS: うん。(自己調整)
- 4 FS: 好奇心って何ですか。(他者マーク)
- 5 NS: 好奇心ですか。Curiosity。(自己調整)
- 6 FS: あ、はい、はい。
(Miyazaki 1998 66頁 例 3)

FSは、2で聞き返しを行ったが、調整行動がうまくいかなかったので、4でさらに具体的な説明要求のための調整理解ストラテジーを使った。このディスコースではあわせて2度の調整行動を伴った発話交換が行われたと分析できる。

問題点 5 への再考 現在の意味交渉研究では、対象になっている参加者のバリエーションが限られている

これまでの研究は、接触場面での参加者のバリエーションを考慮していない。4で述べた、調整フレームとは別に、調整行動のデザインを決定するもう一つの要素として、ネットのワークデザインに注目する必要がある。調整行動の連鎖とともに、参加者のバリエーションによっても、調整のディスコースデザインは異なるからである。ここでいうバリエーションとは、主に参加者の構成を指す。ネットワークにおける基本的な参加者の構成要員は、発話者自身と聞き手である他者であるが、自己調整の場合には、調整は話し手一人によって行われる。次のディスコースを検証してみよう。

例 7

- 1 FS: あ、ウィンブルドンの季節は、毎晩徹夜です。あ、わかるかな。
徹夜、夜ずっと起きてる。で、衛星生中継でウィンブルドン見てる。
(Miyazaki 1998 142頁 例 3)

これは、FSの相手である日本語母語話者自身が自分の趣味について話しているディスコースである。ここでは、母語話者の発話の「徹夜」という語彙に関して、FSが理解上

の問題を起こしたのではないかと考え、発話の途中で確認チェックタイプの不適切マーカである、「わかるかな。」を用いた。さらに繰り返しの「徹夜」、言い換えの「夜ずっと起きてる」といった自己複合調整タイプのディスコースになっている。一方、多くの接触場面、例えば教室場面、ビジネスミーティング、またはパーティのような集まりで、3人以上が調整行動に参加するマルチ参加者間調整が考えられる。このマルチ参加者間調整では、発話の順番取りが不確定であり、現在の話し手と直接の聞き手以外の第3者が、調整行動過程で、仲介訂正という独特な役割を果たすことが実証されている（宮崎 1990）。

マルチ参加者間調整のディスコースは、例えば以下のような場合である。

例 8

- 1 FS1: あのう、なにゴルフコースへ行きま えいらっしゃいましたか。
- 2 NS: はい? (他者マーク)
- 3 FS1: なんゴルフコース あのう。(自己調整)
- 4 FS2: うん、ななん。(自己調整)
- 5 FS3: どこで、ゴルフをしますか。(自己調整)
- 6 NS: ああ。

(Miyazaki 1998 170頁 例3)

例8のディスコースの構成員は4人であるが、2のNSの反復要求に対し、FS1の自己調整およびFS2とFS3による仲介訂正が見られる。このようにマルチ参加者間調整の場合は、二人の接触場面のディスコースに比べ、さまざまな調整行動が現れる可能性がある。ちなみに参加者のバリエーションは、参加人数だけではない。成人以外には、年少者による意味交渉もありうるし、非母語話者同士の交渉も考えられる。とくに、第二言語として日本語を習得する場面では、日本語を母語としない参加者同士のインターアクションが起こりうる。この場合の参加者は、目標言語のコミュニティに属するメンバーがその行動に関してある決まった方法で行動するであろうという一般的な期待 (Coulthard 1985: 54-58)、または「言葉に対する態度」(Fishman 1971: 221)と定義づけられる規範のモデルを提供することができない。Fan (1992)は、接触場面の参加者のバリエーションに注目し、どのような規範が支配的かによって、3つの接触場面が存在すると主張している。その場面とは、参加者のうちの一人がネイティブスピーカーによって構成されている「協力者場面」(partner situations)、例えば英国の英語話者とオーストラリアの英語話者との接触のように、同一ではないが類似の規範を共有している参加者によって構成される「共通言語場面」(shared language situation)、そして韓国人と日本人による英語を媒介とした接触場面のように、英語のネイティブスピーカーが不在の場合の「第三者場面」(third party situation)に分類している。それぞれの接触場面で、どのようなインターアクションの問題が起きるのか。現時点では、十分な実証研究が行われていない。

問題点6への再考 意味交渉が起きる場面のバリエーションは、多岐に渡っている

意味交渉は、接触場面で実際に対面する参加者間でのみ行われるわけではなく、ある場面空間を参加者が共有しない場合でも起こりうる。例えば、電話によるインターアクション

の中で起きた問題を意味交渉によって解決するといった場合もある。町田（1997）は、電話によるインターアクションの中で、非母語話者が行う「交渉」、「母語話者の調整を引き出した交渉」、それに「引き出された調整」という項目についてデータを収集し、分析した。大学の留学生別科で日本語を学ぶ留学生と長期間日本に住んでいる超上級レベルの外国人、それに日本人学生の、ある課題を達成する過程での意味交渉を検証した。その結果、日本語能力が低い非母語話者ほど、頻繁に「交渉」を行い、結果として多くの非母語話者の「調整」を引き出していたことがわかった。

電話以外で意味交渉が起きる場合として、ここ数年、遠隔教育の中で利用されているビデオ会議システムを通したインターアクションも今後検証していく必要がある。ビデオ会議システムとは、主にデスクトップ型パーソナル・コンピューターを介した双方向の通信映像システムで、デスクトップ用小型カメラによって映し出されるお互いの映像を見ながら、ヘッドセットのマイクを通して、音声によるリアルタイムのインターアクションを可能にしたものである。今後、日本と海外の、日本語教師、日本語学習者、その他の日本語教育関係者間での情報交換に、どの程度効果的に機能するのかを調べる必要がある。

問題点7への再考 意味交渉研究でデザインされているタスクは、自然な場面で起きる交渉を反映していない

ここでは、これまで行われてきた意味交渉研究でデザインされてきたタスクについて言及したい。データを記録する場合、調査者は、自らがデザインしたタスクが、調査対象である参加者にとって、自然なインターアクションであるかどうかという問題について、どの程度関心を払っているのだろうか。我々の関心事は、日本語学習者が、実際使用場面のインターアクションのなかで、どのような問題に遭遇しているのかであって、異次元で起きるとしか考えられない人工的なタスクの中で起きる問題ではない。また、研究成果は、実際のインターアクション場面で起きる問題を解決する処方箋であることを忘れてはならない。表1は、英語と日本語を第二言語とする、主な意味交渉の先行研究のうち、実証研究の方法論について、発表年、交渉タイプ、調査対象者数、対象者の性別、第一言語、第二言語、学習レベル、タスクを行った参加者のインターアクションの形態、その組み合わせ、タスクのタイプ、タスク場面、データ収集方法、データの長さをまとめたものである。この中で、とくにタスクのタイプについて注目してみよう。多くの研究者が、ジグソーパズル、絵描きタスク、間違い探し、マップタスクなどといった、成人学習者が、実際使用場面では、めったに行わないタスクをデザインし、なおかつ、意図的に交渉を誘発している傾向がある。繰り返しになるが、意味交渉研究の大きな使命は、学習者が、接触場面で遭遇する可能性が高いと思われるディスコース問題に対し、対処法が明記された処方箋を調合することにある。実際使用場面でのデータ収集については、方法論の理論家の仕事だけではなく、すべての調査研究者が懸念すべき課題として、留意しなければならない。

研究番号	著者	発表年	交渉のタイプ	課題の種類	性別	対象者の第一言語	第二言語 (L2)	学習レベル	ペア: P グループ: G 数量: C	NS/NIS NS/NIS NIS/NIS	交渉のタイプ	タスクの種類	データの長さ
1	Schwartz	1980	meaning	6 NISs	Mixed	Mixed	Eng	L6, L7 & 28	P	NIS/NIS	casual conversation	classroom	45 min
2	Scarcella and Higa	1981	comprehensible input	7 NISs 14 NISs	N/P	Spanish	Eng	child adolescents	P	NS/NIS	book-building	N/P	98 min
3	Caynes & Porter	1981	understanding	4 NISs 8 NISs	Mixed	Mixed	Eng	A	G	NS/NIS NIS/NIS	group discussion	N/P	66 min
4	Gaies	1982	topic	5 NISs 11 NISs	F(NIS)	N/P	Eng	N/P	P	NS/NIS NIS/NIS NIS/NIS	loosely-defined	N/P	150 min
5	Long	1983	comprehensible input	16 NISs 48 NISs	N/P1	Mixed	Eng	N/P	P	NS/NIS NIS/NIS	communication game, discussion	N/P	15 hr 20 min
6	Long & Sato	1983	meaning	NIS(N/P) 6 NISs	NIS N/P/NIS (Mixed)	Mixed	Eng	L	C	NS/NIS	classroom interaction	classroom	N/P
7				36 NISs 36 NISs	Mixed	Japanese	Eng	L	P	NS/NIS	casual conversation	N/P	180 min
8	Dey et al.	1984	meaning	20 NISs 36 NISs	N/P	N/P	Eng	L/T/A	P	NS/NIS	casual conversation, game	social settings	763 min
9	Selinker & Douglas	1986	self-assertion (many data)	1 NIS 2 NISs	Mixed	Spanish	Eng	N/P	P	NS/NIS	informant session	N/P	over an hour
10			self-assertion (secondary data)	1 NIS 2 NISs	Mixed	Spanish	Eng	N/P	G	NS/NIS	play-back session	N/P	N/P

論文番号	著者	発刊年	記事のタイプ	語彙の種類	性別	第1言語	第2言語 (L1/L2)	学習レベル	ペグ: P グループ: G 自由: C	NS/NES NS/NES NES/NES	クラスのタイプ	クラスの教育	データの 収録形式	データの長さ
11	Gass & Varonis	1986 a	meaning	8 NNSs 2 NESs	F	Mixed	Eng	L & I	P	NS: NES NS: NES	telephone interview	N/P	ATR	N/P
12	Gass & Varonis	1986 b	meaning	9 NNSs	Mixed	Mixed	Eng	I	P/G	NNS: NNS	picture- drawing	N/P	ATR	80 min
13	Pica & Douglas	1986 b	comprehens- ible input	34 NNSs 3 NESs	N/P	Mixed	Eng	L & I	G/C	NS: NNS NNS: NNS	decision- making	classroom	ATR	N/P
14	Varonis & Gass	1986 b	meaning	28 NNSs 8 NESs	Mixed	Spanish Japanese	Eng	N/P	P	NS: NS NS: NES NES: NNS	casual conversation	N/P	ATR	110 min
15	Duff	1986	meaning	8 NNSs	Mixed	Mixed	Eng	I	P	NNS: NNS	problem- solving, debates	researcher 's office	ATR	20 min
16	Gass & Varonis	1986	meaning	20 NNSs	Mixed	Japanese	Eng	N/P	P	NNS: NNS	picture- drawing, casual conversation	N/P	ATR	300 min
17	Pica, Douglas & Young	1986	comprehens- ible input	9 NNSs 1 NS	N/P	Mixed	Eng	I	P	NS: NNS NES: NNS	assembly	N/P	ATR/VTR	N/P
18	Porter	1986	meaning	12 NNSs 6 NESs	M	Spanish	Eng	I & A	P	NS: NNS NES: NNS	problem- solving	N/P	ATR	10 hrs
19	Rulon & McCaskey	1986	meaning, content	28 NNSs 2 NESs	Mixed	Mixed	Eng	I & A	G/C	NS: NNS	discussion	classroom	ATR	36 min
20	Pica & Long	1986	meaning	NNS(N/P) 10 NESs	Mixed	Mixed	Eng	L	C	NS: NNS	classroom interaction	classroom	ATR	100 min
21				16 NNSs 16 NESs	N/P	N/P	Eng	N/P	P	NS: NNS	informal conversation	N/P	ATR	80 min

論文番号	著者	実験中 活動のタイプ	活動のタイプ	活動の長さ	性別	母語の 第一言語	第二言語 (L2) (母国語)	学習レベル	ペアリング グループ: G 数量: C	MSMS MSMS MSMS	クラスのタイプ	クラスの構成	ペアの 規模/長さ	ペアの長さ
22					N/P	N/P	Eng	L	C	NS-NNS	classroom interaction	classroom	ACTR	140 min
25	Pica	comprehens- bleinput	comprehens- bleinput	10 NNS 1 NS	Mixed	Spanish	Eng	L	P	NS-NNS	casual conversation	N/P	ACTR	10 hrs
24	Pica, Young & Doughey	comprehens- bleinput	comprehens- bleinput	16 NNS 1 NS	N/P	Mixed	Eng	L & I	P/G	NS-NNS	picture drawing	N/P	ACTR/VTR	N/P
26	Ross	meaning	meaning	8 NNS 1 NS	F	Japanese	Eng	L & A	P	NNS-NNS	Picture drawing	classroom	ACTR	N/P
26	Ozaki	meaning	meaning	3 NNS 1 NS	Mixed	English	Jpn	L & I & A	P	NS-NNS	informal conversation	N/P	ACTR	10 hrs
27	Cameron & Epling	meaning	meaning	46 NNS 1 NS	Mixed	Mixed	Eng	I	P	NNS-NNS	finding the discrepancy	N/P	ACTR/VTR	6 hrs
28	Ehrlich et al	meaning	meaning	4 NNS 1 NS	N/P	Japanese	Eng	I	P	NS-NS NS-NNS	picture drawing, problem- solving	N/P	ACTR	N/P
29	Pica et al	comprehens- bleinput	comprehens- bleinput	10 NNS 10 SS	Mixed	Japanese	Eng	I	P	NS-NNS	picture drawing, fig. sk., opinion exchange	office & meeting room	ACTR	N/P
30	Takahashi	meaning	meaning	10 NNS 1 NS	F	Mixed	Eng	I & A	P	NS-NNS NNS-NNS	telephone interview	N/P	ACTR	150 min
31	Wolken & Shades	meaning	meaning	3 NNS 3 NS	F	Mixed	Eng	A	P	NS-NNS	problem- solving	computer office	VTR	2 hrs

論文番号	著者	発表中	授業のタイプ	課数の数	性別	母国語の第一言語	第二言語 (L2) (母国語)	学習レベル	ペーパー: P グループ: G 発表: C	NS/NIS NS/NIS NIS/NIS	クラスのタイプ	クラスの構図	データの収集方法	データの長さ
32	Zuengler	1989	meaning	27 NISs 20Ns	M	Mixed	Eng	A	P	NS-NIS	explanation task	N/P	KTR	540 min.
33	Goldstein & Conrad	1990	meaning revision	3 NISs	Mixed	Mixed	Eng	A	C	NS-NIS NIS-NIS	classroom conference	N/P	KTR	200 min.
34	Yule & MacDonald	1990	comprehensible input	40 NISs	N/P	Mixed	Eng	I & A	P	NIS-NIS	problem-solving	N/P	KTR	N/P
36	Brown	1991	meaning	16 NISs	Mixed	Singhalese	Eng	A	G	NIS-NIS	decision making	N/P	KTR	45 min.
36	Kumazawa & Iiyeh	1991	meaning	2 classes	Mixed	Mixed	Eng	I	P/C	NS-NIS NIS-NIS	scanning advertisement	classroom	KTR	N/P
37	Pica	1991	meaning	16 NISs 80Ns	Mixed	Mixed	Eng	I	C	NS-NIS	direction-giving	classroom	observation	N/P
38	Pica et al.	1991	meaning	32 NISs 32Ns	Mixed	Japanese	Eng	L & I	P	NS-NIS	picture-drawing, fig. SW, opinion exchange	N/P	KTR	N/P
39	Ross & Berrick	1991	meaning	66 NISs	N/P	N/P	Eng	N/P	P	NIS-NIS	N/P	N/P	KTR	N/P
40	Zuengler & Bent	1991	topic	45 NISs 45Ns	Male	Mixed	Eng	A	P	NS-NIS	explanation task	N/P	KTR	900 min.
41	Tarada	1992	meaning	8 NISs 36Ns	Mixed	Mixed	Jpn	L & I	P	NS-NIS	problem-solving	outside classroom	KTR	N/P
42	Brooks	1992	meaning	9 NISs	N/P	N/P	Spn	I	G	NIS-NIS	topic conversation	classroom	KTR	N/P

論文番号	著者	年次	交渉のタイプ	課題の種類	性別	対話者の第一言語	第二言語 (L2)	学習レベル	ペア: P グループ: G 独学: C	MSMS MS-NMS NMS-NMS	交渉のタイプ	タスクの種類	テープの長さ	テープの長さ
43	Kaneho	1992	negotial	6 NMSs 6 NMSs	Mixed	English	Jpn	A	P	MS-NMS	interview	N/P	AIR	2 hrs
44	Suzada & Rounds	1993	meaning	8 NMSs 8 NMSs	Mixed	Mixed	Eng	I	G	MS-NS NMS-NMS	spotting the difference	N/P	VTR	N/P
45	Plough & Gass	1993	meaning	20 NMSs	Male	Mixed	Eng	I	P	NMS-NMS	spotting the difference guessing task	N/P	AIR	120 min.
46	Nobuyoshi & Ellis	1993	outcome	6 NMSs	N/P	Japanese	Eng	L	P	NMS-NS	picture jigsaw, communicati	N/P	AIR	N/P
47	Doi	1993	meaning	20 NMSs 4 NMSs	Mixed	Mixed	Jpn	L, I & A	P	MS-NMS MS-NMS	informal conversation	N/P	VTR	5 hours
48	Yoshida	1994	meaning	4 NMSs 8 NMSs	Mixed	English	Jpn	I	P	NMS-NS	interview	N/P	AIR	480 min.
49	Méndezca & Johnson	1994	meaning	12 NMSs	N/P	Mixed	Eng	A	P	NMS-NMS	peer reviews	classroom	AIR	2-4 hours
50	Gass & Varonis	1994	meaning	16 NMSs 16 NMSs	N/P	Mixed	Eng	I	P	MS-NMS	direction- giving	N/P	AIR	640 min.
51	Yule & Peters	1994	outcome	N/P	N/P	N/P	Eng	N/P	P	NMS-NMS	map task	N/P	N/P	N/P
52	Machida	1996	meaning	12 NMSs 3 NMSs	Male	English	Jpn	L, I & A	P	MS-NMS	telephone conversational task	N/P	AIR	N/P
53	Matsubay- ashi	1996	decision- making	3 NMSs	4F 4M	Japanese English	N/A		P					

論文番号	著者	発表年	発表のタイトル	調査の種類	性別	対象者の 第一言語	第二言語 (L2) (母国語)	学習レベル	ペー: P グループ: G 人数: C	MSMS MS-NMS NMS-NMS	クラスのタイプ	クラスの概要	データの 収録形式	データの長さ
54	Lyster & Ranta	SSL- R19	form	2NNS bilingual 114NNS/ bilingual	3F 1M mixed	English	French immersion	grade 4-6	C	NE-NNS teacher- student	normal class	classroom ACTR	ACTR	1100 min
55	Murakami	1996	meaning	1 NNS 9NNS	Female	English	Jpn	A	P	NE-NNS	information gap (one-way & two-way)	superviso r's office teacher's office home	ACTR	360 min
56	Yamada	1996	meaning	N/P for NE 14 NNS	Mixed	English	Jpn	I & A	P	NE-NNS	object location, picture description	N/P	ACTR	250 min
57	Musumeci	1996	meaning	NNS/N/P 13 NNS	N/P	English	Ita	N/P	C	NE-NNS	classroom interaction	classroom	VTR	150 min
58	Enomoto	1997	meaning	30 NNS	Mixed	Mixed	Jpn	I & A	P	NNS-NNS	information gap/role- playing	N/P	ACTR	360 min
59	Van den Branden	1997	meaning, form, content	46 29F 19M		10 to Dutch	Dutch	low/very low /high/very high	P	NE-NNS	picture description	L.L.	ACTR	N/P
60	Lyster	1998	form	4 teachers	N/P	English	French	grade 4-6	C	N/P	normal class	classroom	ACTR	183 hours
61	Oliver	1998	meaning	128NNS 64NNS	N/P	10 to English	English	ASLER 2.0-3.5	P60	NE-NNS	picture description	N/P	ACTR/VTR	1800 utterance

論文番号	著者	発表年	発表のサイト	調査の種類	性別	対象者の 第一言語	第二言語 (L2) (Native/DIF)	学習レベル	ペー: P グループ: G 人数: C	MSMS MSMS MSMS	タスクのタイプ	タスク教育	データの 収集方法	データの形式
62	Mackey & Philip	1998	recasts	36NMS 6NS	NMS 17M 19F, NS 3F 2M	no 1r English	English	less than 7 months in Australia	P	NS; NNS	spot the difference, picture drawing, story completion	N/P	KTR	N/P
63	Foster	1998	meaning	21NMS	19F 2M	no 1r English	English		F(6), G(6)	NNS; NNS	grammar task, picture differences, group consensus, map information	classroom	KTR	4 lessons 25mins transcribed

Note: 1. N/P: Not provided, 2. Eng: English, 3. Spn: Spanish, 4. Jpn: Japanese, 5. 1st Italian, 6. L: low, 7. I: Intermediate,
8. & Advanced 9. KTR: Audio-tape recording, 10. VTR: Video-tape recording

問題点 8 への再考 意味交渉の研究成果は、日本語教育に反映されていない

以上、分析方法とデータ収集方法の観点から、現在の意味交渉研究で十分解明されていない課題を列挙してきた。今後、この研究を拡大、発展させるために緻密なデザインが求められる。しかし、こうしたデザイン面での改良によってもたらされた成果は、どのように応用されるべきであろうか。具体的には、日本語教育場面で使用されるテキストへの応用などが考えられるが、果たして、これまでの教材の中で、意味交渉の成果はどのように活かされてきたのであろうか。表 2 は、日本国内及び海外において、教科書として使われている代表的なテキストである。これらは、主にコミュニケーションのための教材として編集されたものであるが、その中の会話ディスコースに注目し、意味交渉による調整行動がどの程度導入されているのかを調査した。

表 2 意味交渉と日本語教科書

	インプットのための調整		アウトプットのための調整	
	他者マーク自己調整	自己マーク自己調整	自己マーク他者調整	他者マーク他者調整
A	×	×	×	×
B	×	×	×	×
C	×	×	×	×
D	○	×	×	×
E	○	×	×	×
F	×	×	×	×
G	×	×	×	×
H	○	×	×	×
I	×	×	×	×
J	○	×	×	×
K	×	×	×	×
L	○	×	×	×

- A An Introduction to Modern Japanese (水谷修・水谷信子著 ジャパンタイムズ 1977)
 B Basic Functional Japanese (ベガサスランゲージサービス編 ジャパンタイムズ 1987)
 C Japanese: The Spoken Language Part 1 & 2 (Jorden, E. & M. Noda 1994)
 D Japanese for Everyone (名柄迪他編著 学習研究社 1990)
 E Japanese for Busy People (国際日本語普及協会(AJALT))編 講談社インターナショナル 1994-1998)
 F An Introduction to Intermediate Japanese (水谷信子著 凡人社 1990)
 G Elementary Course in Japanese (いしいようこ著 アルク 1991)
 H Office Japanese (高見澤孟著 アルク 1991)
 I ようこそ 1 & 2 (Tohsaku 1994)
 J Total Japanese Conversation 1 & 2 (Waseda International Division)
 K Interactive Japanese (Tomoda and May 1996)
 L Interacting with the Japanese: A comprehensive communication course Book 1-4 (Neustupny 1994)

その結果、聞き返しのストラテジーの基本型となる、「他者マーク自己調整」型意味交渉を導入している教科書は数例あるものの、他の調整行動は、モデル会話としてのディスコースの中でまったく反映されていない。こうした事実から調整行動に対する教材作成者の態度が見えてくる。一般的に教科書には、インターアクション問題のないディスコースを採用する傾向が強く、問題をどのように取り除くかという調整行動にはほとんど関心がない。我々は、「モデルダイアログ」ということばの意味をもう一度再考してみなければならぬ。モデルとなるダイアログとは、インターアクション問題を含んでいないという意味ではなく、そうした問題が起きた場合、どのように取り除けるかというストラテジーを例示し、その習得方法の過程を、テキストの中で明示しなければならない。こうしたアプローチは、これからの教材作成の考え方に大きく影響し、結果的に意味交渉研究を前進させることにつながる。

3. おわりに

以上挙げた8つの課題に対する検討は、意味交渉研究が新しいパラダイムの中で発展する可能性と無関係ではない。これまでの意味交渉研究の特色を、ある程度捉えている、ストラテジーの類型化、意味、聞き返しのストラテジー、単純調整、二人の参加者による対面交渉といった特徴だけに注目する態度は、これからの意味交渉研究の拡がりを考える場合、研究の推進を阻害する可能性をもたらす。なぜならば、そうした特徴は、バリエーションを提示し、プロセスを強調する原理を有するポストモダンの研究方法と相反するものであるからだ。

実際使用場面でのデータ記録を尊重しない態度も、社会問題を記録するというポストモダンのアプローチと異なる。さらに付け加えるならば、研究成果が教科書や教材作成に活かされていないことも、応用性を尊重する新しい方法論にそぐわない。意味交渉研究の発展を考える場合、8つの課題への早急な対応が望まれる。

参考文献

- Day, R., N. Chenoweth, A. Chu and S. Luppescu. 1984. "Corrective feedback in native-nonnative discourse". *Language Learning*, vol.34, no.2. pp.19-45.
- Faerch, C. and G. Kasper. 1983. "On identifying communication strategies in interlanguage production". In C. Faerch and G. Kasper. (eds.). *Strategies in Interlanguage Communication*. London: Longman. pp.210-238.
- Fan, S. K. 1992 *Language Management in Contact Situations between Japanese and Chinese*. Unpublished Ph.D. thesis. Department of Japanese Studies. Monash University.
- Gass, S. and E. Varonis. 1985. "Task variation and non-native/non-native negotiation of meaning". In S. Gass and C. Madden. (eds.). *Input in Second Language Acquisition*. Rowley, Mass.: Newbury House. pp.149-161.
- Gass, S. and E. Varonis 1994 "Input, interaction and second language production". *Studies in Second Language Acquisition*, vol. 16, no.3. pp.283-302
- 国際日本語普及協会 (AJALT) 編 1994 *Japanese for Busy People*、講談社インターナショナル
いしきようこ 1991 *Elementary Course in Japanese* アルク
- Jorden, E, and M. Noda 1987 and 1988 *Japanese: The Spoken Language Part 1 & 2*、講談社
- Jefferson, G. and J. Schenkein 1977 "Some sequential negotiations in conversation: Unexpanded and

- expanded versions of projected action sequences”, *Sociology*. Volo.11. no.1. pp.87-104
- Krashen, S.D. 1982 *Principle and Practice in Second Language*, Oxford: Pergamon Press
- Long, M. 1983. “Linguistic and conversational adjustments to non-native speakers”. *Studies in Second Language Acquisition*. vol.5. no.2. pp.177-193.
- 町田延代 1997 「電話におけるフォーリナー・トーク・ディスコースの違いー日本語非母語話者の言語能力と交渉ー」、『第二言語としての日本語の習得研究』、第1号、第二言語習得研究会・編、凡人社、83-100頁
- 宮崎里司 1990 「接触場面における仲介訂正ネットワーク」、『日本語教育』、71号 171-181頁
- Miyazaki, S. 1998. *Communicative adjustment between native speakers and non-native speakers of Japanese in contact situations*. Unpublished Ph.D. thesis. Department of Japanese Studies. Monash University.
- Miyazaki, S. 1999a “The Role of Flag as an inadequacy marker in Japanese language acquisition”, In *Representation and Process*. P. Robinson (ed.). pp.95-106
- 宮崎里司 1999b 「第二言語習得とコミュニケーション調整モデル」、『日本語研究と日本語教育：森田良行教授古稀記念論文集』、明治書院
- 宮崎里司 1999c 「接触場面でのコミュニケーション調整とそのディスコースパターン：自己マーク自己調整を中心として」、『早稲田日本語研究』、7号、早稲田大学国語学会、65-76頁、東京：ひつじ書房
- Miyazaki, S. 2000 Communicative adjustment and adjustment marker: The point of request for clarification, 『第二言語としての日本語の習得研究』、vol.3、pp.57-93、第二言語習得研究会
- Miyazaki, S. 2001 Theoretical framework of communicative adjustment in language acquisition, *Journal of Asian Pacific Communication*, vol.1, no.1 pp.40-60.
- 水谷信子 1990 An Introduction to Intermediate Japanese 凡人社
- 水谷修・水谷信子 1977 An Introduction to Modern Japanese ジャパンタイムズ
- 名柄迪他編著 1990 Japanese for Everyone 学習研究社
- Neustupny, J.V. 1985. “Problems in Australian-Japanese contact situations”. *Cross-Cultural Encounters: Communication and Mis-Communication*. In J.B. Pride. (ed.). Melbourne: River Seine Publications. pp.44-84.
- Neustupny, J.V. 1987 *Communicating with the Japanese*, Tokyo: The Japan Times
- Neustupny, J.V. et. al. 1994 *Interacting with the Japanese: A comprehensive communication course* Book 1-4, Melbourne: Japanese Studies Centre
- 尾崎明人 1993 「接触場面のストラテジーー聞き返しの発話交換をめぐってー」、『日本語教育』、81号、19-30頁
- ベガサスランゲージサービス編 1987 Basic Functional Japanese ジャパンタイムズ
- Pica, T. (1991) “Do second language learners need negotiation?”, PENN Working Papers. Vol.7, no.21, pp.1-35.
- Schegloff, E.A., G. Jefferson and H.E. Sacks. 1977 . “The preference for self-correction in the organization of repair in conversation”. *Language*. vol.53. no.2. pp.361-382.
- Swain, M. 1985. “Communicative competence: Some roles of comprehensible input and comprehensible output in its development”. In S. Gass and C. Madden. (eds.). *Input in Second Language Acquisition*. Rowley. Mass.: Newbury House. pp.235-253.
- 高見澤孟著 1991 *Office Japanese* アルク
- Tohsaku, Y. 1994 and 1995 *Yookoso! An invitation to contemporary Japanese*, New York: McGraw Hill
- Tomoda, T. and B. May 1996 *Interactive Japanese 1: An introductory course*. 講談社インターナショナル
- Waseda University International Division 1994 *Total Japanese Conversation 1 & 2*, 凡人社

注

¹ 繰り返し要求 (11課) hearing checks and explanation requests (19課)

- 説明要求 (21課) R C
² 説明要求 (13課) R C
³ hearing checks and explanation requests (9課) R C
⁴ 説明要求 (2、11課)、理解チェック (26課)、繰り返し・説明要求 (38課)
⁵ 説明要求 (Book 1,2 & 3)、繰り返し・説明要求 (Book 1 & 2